能登黒島天領太鼓

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23888

5. 能登黒島天領太鼓

木 村　伶 美

1.　はじめに
2.　天領太鼓とは
3.　黒島の天領太鼓
4.　祭礼の中の天領太鼓
5.　考察
6.　おわりに

1. はじめに

ここ数年で太鼓や三味線など、日本の伝統文化に対する世間一般の興味関心が改めて大きくなってきている。演奏者の中では世界的に大きな評価を受けている人も多く、メディアで目にする機会も増えている。また観光に伝統文化を取り入れたり、地域活性化の一環として用いているところも少なくない。全国的な流れとして伝統を残そう、つなげていこうという風潮が高まっており、これらの伝統は失われてゆくのではなく、「古きよき時代のもの」として伝統文化を行うことが逆に流行になっているような気さえする。私達はメディアを通して伝統文化を知り、時には伝統文化体験などで体験することで実際に触れたような気になってしまう。しかし私達が感じる観光用の伝統と、実際に現地の人々が行っているものとの間にはなんらかの違いがあるのではないか。私達の目に伝統として映るものは同様に現地の人々にとっても伝統でありうるのか。これは昨年の報告書において先輩が論じた点である（藤井　2008)。伝統という枠組みは第三者が取り付けたもので、現地の人々にとっては単なる生活の手段であったり、仕事であったりするもので、当事者と私達との間には対象にたいする見解の違いが存在するということである。しかし昨年と異なる点としては大まかに言って、伝統、ここでは天領太鼓であるが、これを継承維持していこうとしているのが我々第三者ではなく現地の人々自身であること、天領太鼓は生活に不可欠なものではなく、生活を豊かにする付加価値的な役割をもつものであることの 2 点であると考える。

これらをふまえての具体的な関心としては、

(1) 天領太鼓に対する伝統としての意識はどのようなものか

(2) 保存、維持していくためにどのような方策が取られているのか

(3) また黒島の場合は少子高齢という問題を抱えながらであり、このような条件でどのような活動をしているのか

(4) 伝統文化として地域にどのように貢献しているのか

などの問題を、調査報告とともに検討していきたい。

2. 天領太鼓とは

2.1 起源

天領太鼓の始まりは元亀（1570～1573）、天正（1573～1592）であるといわれている。黒島は北前船の経由地であり集落のほとんどがかつては船員という町である。したがって北前船の安全祈願のために、またその他に海上安全・五穀豊穣・天下恭平・国家安全・千秋万歳などの願いも込めて太鼓を叩いていた。黒島天領太鼓という名前がついたのは幕府天領になった貞享元年（1684年）といわれている。それ以前は船員たちが安全を願って叩いていたに過ぎず、特定の呼称などはなかったと思われる。また天領太鼓と名前がついても、すぐに浸透したわけではなく、実際にそう呼ばれるようになったのは伝統意識が高まり保存の動きが出てきたつい最近のことではないかと保存会員のＩさん（70代男性）はおっしゃっていた。

もう一つ、1684年に天領となったことで正月に船員たちが庄屋宅に集まり、今年もお世話になることをお願いして太鼓を打ったのが始まりとする説もあるそうだが、こちらは信憑性が低い。

天領太鼓自体は幕府天領だった地域にはおおむね存在し、それぞれが黒島天領太鼓、倉敷天領太鼓など地域名を頭につけているのが正式名称となっているところが多い。

2.2 天領太鼓保存会

保存会は昭和20（1945）年8月に現会長のＮさん（30代男性）のおじいさんを初代会長として発足した。メンバーは常に10数人ほどで、太鼓の数などの点からちょうど良い人数を維持している。しかしメンバーのほとんどが高齢のために定期的な活動が思うように行えておらず、同時に若い人が入ってきていないことから後継者の問題が大きな課題として存在する。毎週水曜日に行われる定期練習にもほとんどが参加できていないのが現状で、イベントの直前に打ち合わせやほんの練習程度に参加するというのが限界になってきている。

また小学生のときに指導を受け、大人になってからも太鼓を打つことが出来る人は少なくはな

いが、結婚や就職などで金沢に出てしまい帰ってこないので後継者としては難しいというのが現状である。現在のメンバーも高齢であること、黒島の他の役職も兼務していること、黒島に在住していない人もいることなどから定期的な活動も活発には行えていない。

2.3 現在の活動

主なイベントとして 1 月の船方祭り、夏に行われる黒島天領祭、黒島交流祭り、他の活動としては、隔週金曜日の門前西小学校での指導、毎週水曜日の公民館での集合練習などである。黒島交流祭りは毎年10月に行われ、地域の教室の発表の場や黒島の住民の交流の場として用いられる。午前中から露店や食事の準備を行いステージも作られて、ここで天領太鼓も演技を行う。他の活動に関しては下記で順に記述していく。その他毎年 9 月 15 日の敬老の日には、公民館でお年寄りのために叩いている。また石川県太鼓連盟に加盟しているため、連盟からの依頼として外部で演奏することもあり、平成 21（2009）年 2 月 8 日には能登空港で演奏した。

3. 黒島の天領太鼓

3.1 打ち方

大ばいと小ばいにわかれ、大ばいは 3 もしくは 4 打を自由に組み合わせて打つ。合いの手にふちを打ったりもする。腕を振り上げたり大きな音で鳴らしたりして迫力のある演奏をする。小ばいは伴奏で一定のリズムを刻んでいる。大ばいは小ばいの 1 拍目とタイミングを合わせて打つ。決まったリズムはなく、基本を元に各自が競い合って強弱や複雑なリズムをいかに組み合わせて打つかといった感じで叩いている。

太鼓の譜面をおこしたものはなく、感覚や体で覚えていくそうである。

3.2 あぁ天領太鼓

天領太鼓を叩く前に歌う歌だが、祭りのときは歌われず、交流祭りや太鼓の大会など、太鼓のみでの発表の場などで用いられる。これは黒島出身の上原英人さんが作詞したもので、石川県民謡協会が出版している「ふるさと石川の民謡」に記載されている。

3.3 太鼓の保存

太鼓は若波会と神社と保存会がそれぞれ持っており、若波会と神社は 1 つずつ、保存会は 4 つ持っている。若波会とは青年団が組織されていない黒島において青年団のようなものであるが、祭りにおける活動を主とし、それ以外の活動はあまり行っていない。保存会の太鼓は元々2 つしか

なかったが、宝くじの助成金でさらに 2 つ購入したそうである。太鼓の用途によって用いる太鼓が異なり、天領祭などの行事の際は神社の太鼓が用いられる。保存会の太鼓は練習や交流祭りなどで使われる。4 つの中に 1 つだけ立葵の紋が入った太鼓があり、これは天領になった証として徳川家から許されたものだそうで、最初に購入した太鼓である。結婚式など特別な場で用いられ、その際にはしめ縄がはられる。

3.4 伝統文化教室

小学校での指導は前会長の K さん（男性）が行っていたが、現在は I さんが引き継いでいる。学校主催の伝統文化教室として 4～11 月の第 2、4 金曜日の 13:30～14:30 に、3 年生以上を対象に行っている。基本的なリズムや打ち方を指導し、あとは楽しんでもらうというのが趣旨である。平成 20（2008）年度これによって天領太鼓を習っているのは 8 名で、うち 3 名が黒島の子どもである。伝統文化教室は他にも道下や剣地からも各 1 名ずつ講師としてきており、地域の太鼓や民謡を教えている。おおまかに地区ごとに振り分けられるので、道下、剣地に比べ黒島は子どもの数が少ないため教室の子どもの数も必然的に最も少ない。11 月の上旬に伝統文化教室の閉講式があり、そこでそれぞれ発表の場が設けられる。

子供達は純粋に太鼓を楽しんではいるが、学校の活動の一環という域を出ることは無いというのが I さんの感想である。学校での活動を生かして定期練習に参加した子どももいるそうだが、子ども本人は続かず連れて来た親が興味をもったというケースもある。

4. 祭礼の中の天領太鼓

4.1 船方祭り

船方祭りは 1 月 9～11 日に行われ、天領太鼓は 9 日に行われる宵祭りに参加する。この船方祭りは船員が海上安全祈願のために太鼓を叩いていたものの延長であり、天領太鼓の本来の目的に最も近いものである。今年（2009 年）で 189 回目を数え、戦時中や昨年の能登半島地震などでは中止になったものの、昔から先祖が代々つないできた祭りだという思いから、悪天候でも決行される。今回は実際に私が見てきたものに基づいて具体的な流れを記述していく。

まず 16 時ごろにコミュニティセンターを出発し、金比羅権現を祀ってある若松八幡神社でお祓いをする。お祓いの前にそれぞれが社の中に入るとまず入り口付近にある鰐口を鳴らし、神前にあるお神酒を頂く。そして参列している人々、太鼓の順にお祓いをする。「今日から船方祭りが始まりますので、みなさん初日の宵祭りがんばりましょう」というような開会の言葉が述べられ、気合の入った一打が打たれる。そして祭りの始まりである。太鼓は太い丸太に括り付けられ 2 人

で担いで運んでいく。神社から降りていくときも階段に気をつけながら始終叩いている。神社を降りると最初に角海家の前で太鼓を打ち、その後北町の各家を回る。各家々は5～6分ほどである。ある程度時間が決まってはいるが、要望があった場合や家の人も一緒に打ったりする場合などは延長しても全くかまわない。伝統文化教室で小学生に教えているＩ（70 代男性）さんは、教え子がいた場合は打たせたりもすると言っていた。北町の家を半分回った頃から激しい雨が降り出したが、ほとんどの方は傘もささずに最後まで続行された。北町を回り終えると、ガレージの中で婦人の方々が温かいコーヒーとパンを準備してくれていた。雨で濡れているため温かいコーヒーはとてもおいしく、何人もの方が「コーヒー持っとるけ？」「風邪引くから屋根の下入りまっし」と声をかけてくださり、黒島の方々の温かさを感じた。

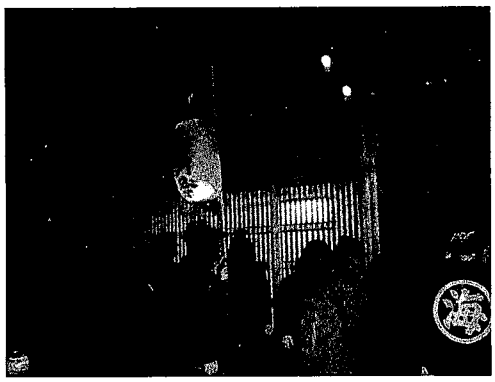
休憩後、福善寺前の「殉職海員之碑」の慰霊碑の前へ移動した。福善寺への階段はとても急で長いものだったが、おじいちゃんたちは私よりも早くスイスイと登って行き、精神的な若々しさと同時に体力的な若々しさも感じた。そして 1 分間の黙祷の後太鼓を大きく打ち鳴らした。次に北町と同様に南町の各家も回り、この途中でコーヒーを準備してくれているお宅があり、そこで小休憩を取った。19 時ごろには終了し、その後コミュニティセンターで食事をとった。ストーブで雨に濡れたコートを乾かしながら、おにぎり、酢の物、焼き鳥など婦人の方々が準備してくれていた食事を取り、翌日の本祭りに備えて 19：30 ごろには解散した。ここでも帰る際におにぎりやお茶を持たせてくれ、とてもうれしかった。

全体を通して家から家への移動の際も太鼓は始終打ち鳴らし続けられていた。高張りという「船方祭」と書いた大きな提灯を持つ人が 2 人おり、それは行列より少し早く次の家の玄関先に立つ。これを目印に太鼓は移動していくことになる。各家では太鼓を置くゴザを敷き、お神酒やお金を準備しておく。玄関の中に太鼓を入れられない家は軒先などで行われる。一軒につき 3、4 人ほどがかわるがわる打ち、最後には大きな声を張りあげて打ち鳴らす。回る軒数は例年 30 軒、多くても45軒ほどで、軒数が多いときには3年に1度しか順番が回ってこないときもあったそうである。しかし現在は軒数も減少し、今年平成 21（2009）年には北町 12 軒、南町 13 軒で計 26 軒だった。以前は子供達が伊勢音頭を歌いながらついて回ったものだが、最近は少子化の影響でなくなっている。なぜ伊勢音頭なのかは分かっていない。

一等航海士や船長などの免状を持つ家は優先して毎年回られていたが、これは船乗りのための祭りであるので、船を降りてしまえば一般人と同じ扱いになる。よってほとんど全員が引退している現在は、区長や老人会会長など何らかの役職についている人も優先することになっている。また今年（2009 年）に限っては、昨年の能登半島地震の影響で倒壊し立て直した家が多いことから、そのような新築した家も優先された。

しかし現在叩き手が減少し（5～6 人）、かつ高齢化しているため継続の見通しは非常に困難だと

見られている。また太鼓が家に回ってくることを辞退する家も出てきたことから、最近はあまり歓迎されていないと感じているそうである。辞退の理由としては家の建て替えなどで家の造りが変わり玄関が太鼓を入れるほどに大きくないことや、加えて正月の飾りなどが置いてあるため、あまり大きな太鼓に入ってきてほしくないと考えるところも増えていること、役職者は毎年回ってくることになるため1年おきくらいで辞退することが多いことなどだと区長さんやIさんがおっしゃっていた。



4.2 天領祭

天領祭は8月18、19日に行われ、太鼓も両日とも参加する。以下の記述は私が実際に見たものと後日の聞き取りに基づく。南出の曳山・子ども神輿・旗持ち・奴振り・太鼓・大神輿・北出曳山の順で練り歩く。太鼓は奴の声がかき消されないようにある程度の距離を保って進んでいく。しかし少子化で子どもの数が減少し、平成21（2009）年には、距離をとっても奴の声が聞こえなくなってしまったため、大神輿と順番を交代し、更に距離をとっていた。今回の交替に見られるように臨機応変に変化してきたものだと思われる。この奴振りの声や笛の音などと共に行列は行進していくが、太鼓はそれらとは関係なく独立してリズムを打っている。腕を大きく振りかぶって打ち鳴らす大ばいは豪快で、また人によっても様々に打ち方が異なる。「○○さんは上手やねー」「技術が違うわ」という言葉を所々で聞いた。互いの技術を披露し合いながら高めあい一層の迫力を増す天領太鼓は行列を盛大に盛り上げるために欠かせないものである。

保存会のメンバーや太鼓を叩ける人が交替で叩いていくが、途中の道端に経験者を見つけると引っ張ってきて叩かせたりもする。多くは小学生のときに習っていて、結婚・就職などで金沢などに出ており、祭りに合わせて帰省している人たちである。

1日目は神社での御祓いから始まり、太鼓は最初は丸太にくくりつけた状態で打ちながら進んでいく。神社の坂を下り、平地につくとリヤカーに乗せて2人で引っ張っていく。行列について進んでいき、時々各家の前で止まっては大きく打ち鳴らすこともあった。1日目は曳山を南町の端に

置き、終了する。浜に設置された御仮屋では、昔は盆踊りが行われていたそうだが現在は行われておらず、2日目の出発地点として使われる。夜のうちにこの御仮屋に太鼓を運んでおくのだが、その際に祭りとは関係なく太鼓を打ち鳴らしており、盛大な1日目の余韻が感じられた。

2日目は朝一番に南町の端にある曳山を神社の下に移動させてくることから始まる。その後数時間が空き、午後から御仮屋を行列が出発し祭りは再開され、1日目と同じ順番で行進していく。太鼓はここでもリヤカーで引かれて打ち鳴らされていく。

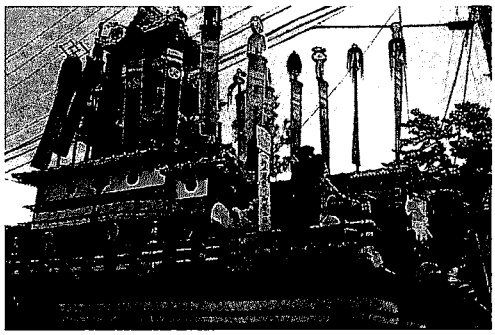
天領祭において、保存会の役割は天領太鼓を叩くほかにもある。笛のお囃子が入ったテープを流す人、太鼓・しめ太鼓を叩く人、鐘を打つ人、しゃぎりを打つ人の4人が曳山の館の中に入って演奏している。館というのは、曳山の内部の空間の名称である。太鼓・鐘・しゃぎりはテープに合わせて演奏していく。このテープは祭り用に5種類あり、それぞれタイミングが決まっている。ここでは平成8（1996）年からずっとテープの係りを続けているOさん（80代男性）への聞き取り調査をもとに記述する。

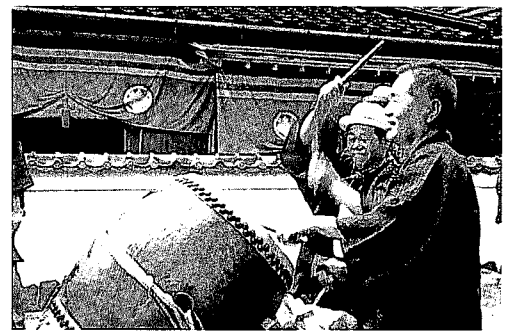
まず天領祭初日に曳山が資料館を出発してお宮の下まで移動するさいは「蘭丸囃」を流す。そして神社での祭礼が終わり、奴振りが鳥居まで降りてくると「吹き出し笛」を流す。これは1分42秒しかないのでタイミングがとても難しい。その次に「祇園囃」である。吹き出し笛囃はこの祇園囃に続くための合図のようなものだと考えてよい。この祇園囃は、神輿のお供として流されるもので、奴振りが降りてきたころに吹き出し笛を流すことで、神輿と祇園囃のタイミングが合うようになっている。この祇園囃を、曳山が北町の北端に辿り着くまで流し続ける。北端に着くと「曳山廻し囃」で曳山の方向転換をする。北端で神輿が休んだ後、再び奴振りが降りてくるのに合わせて「吹き出し笛囃」「祇園囃」の順で流す。1日目はそのまま神輿がお仮屋に入っていくまで祇園囃を流す。これで1日目は終わりである。

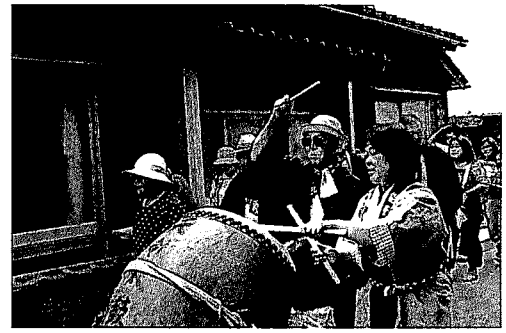
2日目は朝9時に資料館を南町曳山が出発し、南端へ向かう。このときは「蘭丸囃」だけを流している。北町の曳山は、神輿がお仮屋から上がってくるのに合わせて「祇園囃」を流しながら南端に向かう。1日目同様南端で神輿は休み、その後奴振りに合わせて「吹き出し笛囃」「祇園囃」を流していく。そしてお宮の下まで到着すると、「曳山廻し囃」で曳山は方向転換し、「正成囃」を流しながら資料館へ帰っていく。このように決まっている。効率が良いように全てのテープは2本ずつあり、Oさんが管理している。このように、天領祭においても、天領太鼓ならびに保存会は祭りを盛り上げるのに欠かせない存在である。

Oさんは東京で保険会社に28年間勤務し、その後男子寮の管理人に転職、68歳で定年退職して平成8（1996）年に黒島に帰ってきた。その年の天領祭で、人手が少なかったために曳山の館の係りを頼まれたそうである。この館の仕事は保存会の役割であり、必然的に保存会のメンバーとなることになった。それならばと太鼓を始めてみたそうである。当時は亡くなられたYさん（男性）

が会長をしており、手を大きく振りかぶって叩くことや、だらしなくならないように前掛けは下げすぎない、など多くのことを教えてもらったという。だが最近になってある程度叩けるようになったと思った頃に80歳になってしまい、体力的にも引退を考えているそうである。しかし後は若い人に任せる、といってもバトンを渡す若い人がいないことに頭を悩ませている。







5. 考察

ここでは冒頭で述べた関心点に基づき、今回の調査で得た理解の範囲で考察していきたいと思う。具体的な関心点は以上である。

(1) 天領太鼓に対する伝統としての意識はどのようなものか
(2) 保存、維持していくためにどのような方策が取られているのか
(3) また黒島の場合は少子高齢という問題を抱えながらであり、このような条件でどのような活動をしているのか
(4) 伝統文化として地域にどのように貢献しているのか

考察するに当たって (1) と (4)、(2) と (3) は互いに重複する点があるため、合わせて 2 つの考察点として考えていくことにする。

まず (1) (4) についてである。天領太鼓が最も活躍する場として挙げられるのが4章で述べた祭礼における活動である。天領祭、船方祭り、ともに長い歴史を持ち、これもまた伝統であるといえる。特に夏に行われる天領祭は非常に華やかで、人々の大きな楽しみとなっている。しかしここで気付いたのが、人にとってこれらは継承していきたい伝統文化として考えられているようには見受けられなかったという点である。天領祭は1年に1回の大きなお祭りで、日々の楽しみなのである。同様に船方祭りも、「伝統」を受け継いでいるというよりも、古くからつないできた祭りのたすきを継承していこう、ご先祖様が続けてきたことを自分達もやっていこう、という気持ちの方が大きいように感じた。しかしお祭りという大きなくくりでは生活の一部分であるものが、それを実際に継続していこうと思ったときには意思的に動かなければならない。これらの保存活動や運動が、私達の目には伝統らしさとして映るのではないかと思う。しかしここには伝統に対する見解の違いを見出すことが出来た。私達にとっての伝統とは、歴史的価値や文化的価値があり、その価値を後世に残して生きたいと思うものである。しかし現地で実際に伝統を継承している人々にとって、伝統とは、古くから続いてきた、共に育った生活の一部であり、今の自分たちと同様にこれらかも地域に楽しみをもたらすものとして残していきたいものなのであろうと考える。

次に (2) (3) についてである。しかしこれについては具体的な方策はまだとられていない、というしかない。現在は前述した様々な祭礼での活動など今まで行ってきたことを続けていくことに力が注がれており、今後の継続のための具体的な策はまだとられていないというのが現状である。これから話し合っていかなければならないところである。小学校での伝統文化教室の指導が将来的に有効性のあるものなのかどうか、という点についても、なかなか難しい。3〜6年生の間練習をして叩けるようになってはいるが、結婚就職などで金沢などに出て行ってしまうため後継者に直結して考えることは出来ないし、祭りのときに帰ってきて一緒に少し叩いてみる程度に終わってしまう。その祭りにおいても、お盆の時期と数日ずれているために祭りより前に金沢などに戻ってしまう人が少なくない。実際今年指導を受けた小学生も、伝統文化教室でやってみて楽しかったが、それ以外で自ら天領太鼓を続けるつもりはないという。黒島天領太鼓は、外部への発信などはあまりなく、完全な地域密着型である。したがって、地域の人々の中で継承していかなければ後継されないのである。

最初に天領太鼓の話を聞いたときは、叩き手の高齢化や後継者不足、練習の少なさ、といったマイナス面での印象がとても強かった。しかし実際の祭りの風景を見ると、太鼓を叩いている人たちはとても楽しそうで叩き手の高齢化を感じさせないくらいにダイナミックに祭りを盛り上げていた。高齢化による体調面での問題や人口が少ない黒島で他の役職も兼務していかなければならない状況で、活動が思うように行えていないとはいえ、天領太鼓の伝統としての役割としては

機能しているのではないかと思えた。小学校の頃に習い、金沢などに出て行った人がたまに帰省した際などに久しぶりに叩くことが出来るくらい、ある程度時間が空いてもすぐに叩けることも、定期練習がそれほど活発に行われていない理由の一つでもあるのだと思う。しかし、伝統を残していくためには現在のメンバーだけではもちろん不十分であり、やはり現在の黒島天領太鼓の最も大きな課題は後継者不足である。

黒島天領太鼓は石川県太鼓連盟に加盟しているが、連盟主催の太鼓大会にも 5 年ほど前から参加していない。I さんによると、比較的年齢の若い他地域の太鼓に比べて勢いがなくなってきたと感じ、参加をやめたそうである。また連盟に加入していると平成 21（2009）年の 2 月に行われる能登空港での演奏など連盟からイベントへの参加を依頼されるが、参加可能なメンバーが限られていることや、会費などの問題から連盟の脱退も考慮にいれているらしい。昔は結婚式に呼ばれて太鼓を叩き、祝儀をもらっていたが、最近はそんなことも全くなくなってしまったので収入源もないそうである。

結婚式の例（本書第 9 章）にも見えるように、今までは生活の中に存在していた文化が、生活様式が変わることでそこから切り離されてしまったということであろう。船員の町であった黒島において、太鼓を叩くということは意図的な伝統や継承といった堅苦しいものではなく、海上安全を願ってそれぞれが思いを込めて叩いてきた結果つながってきたものである。おそらく太鼓の音が響くことで村人は船の出港を意識し、心が引き締まったのではないだろうか。その延長として結婚式など節目の場や祝いの場で叩くことで人々の心の中に響くものがあったのだろう。しかしほとんどが船を下り、天領太鼓の本来の目的が失われている今、人々の思いも変容し需要も減少したことで、改めて意図的に継承していかなければならなくなっている。

しかし前述したように、天領太鼓ならびに保存会は黒島の住民の最大の楽しみである天領祭を大いに盛り上げるのに不可欠なものである。太鼓の音があるだけで祭りは一層力強さを増し、盛大なものになる。よって天領祭を今までのように続けていくためには天領太鼓の維持も同時に考えていかなければならない。

6. おわりに

私は夏の本調査に半分しか参加できず、自分で聞いた情報が他メンバーよりも少ない中からテーマを決定することに多少の焦りを感じながら調査に合流しました。しかし合流した初日に黒島天領太鼓のお話を聞かせていただきとても興味を引かれ、これについて書くしかない！と心に決めました。私の地元の祭りは子どもが演じる獅子舞が主役ですが毎年交替していくので、子どもがいなくなれば確実に途絶えてしまうものにも関わらず演じている子供達本人にはきっと継続し

ていくという思いはないのだと思います。しかし太鼓は大人が主役になって、次世代につないでいくものだと感じ、今まで触れたことのない伝統文化に関心を持ちました。その後お忙しい中お時間を取っていただき追加調査に行かせていただきました。また訪れるたびに多くの方にお声をかけていただいて、まるでおじいちゃんとおばあちゃんが一気に増えたような気がしてうれしかったです。何度も追加調査で行かせていただいた黒島の方々はもちろん、夏の暑い中に多くのお話を聞かせて下さった道下の方々にも深く感謝いたします。本当にありがとうございました。